

## 第十四章 大連に出陣せよ

### くく竹芝ふ頭くく

早朝、隅田川河口の竹芝ふ頭にはただならぬ気配が漂っていた。陸軍大本営の中将を筆頭に少尉まで十人の団体に防空頭巾かぶって水筒を肩から掛けたモンペ姿の娘が一人整列し、埠頭で出陣式を行っていた。その周辺は警護の兵士が数十人取り囲んでいた。胸にたくさんの勲章を付けた陸軍幹部に負けないよう、左胸部の半分もありそうな大きな手拭いを縫い付け、所属と「とろろん娘」の名前を墨汁で書き込んでいた。

お忍びの視察ゆえ民間の船をチャーターしたとはいえ、陸軍幹部を乗せる船なので、護衛艦が前後四隻帯同した。本来ならこのクラスの将校が外地に行く場合は軍用機で空路を飛んでいくものだが、引退近い将校の慰労旅行のようなものだった。しかし、裏には裏があるから目が離せない。

陸軍参謀部でありながら外局の陸地測量部はオマケのように同じ船に乗せられていたが、新型戦闘機開発と一緒に取り組んだ安徳君の希望もあつて、フルカワ先生と千葉の宵宵先生が乗ってくれたことが、幹部たちには喜ばしいことだった。

既に新設計の測量用航空機は分解されて満州に運ばれていた。これには民間が協力してくれて柴台社長がポケットマネーで輸送を請け負ってくれたのだった。その礼もかねて柴台社長も民間人代表のような形で乗船していた。

柴台社長はフルカワ先生の設計を高く評価しており、航空技術を盛り込んだ新型戦車の開発について相談したい思惑があつた。

とろろん娘にも思惑はあつた。横須賀の海軍カレーと神戸の海軍カレーを食べ比べするのとだった。

東京の港を出発してほどなく朝食になり、とろろん娘は横須賀カレーを食べることができた。翌朝には神戸の港につき料理人と食材が運び込まれ、そのまま大連に直行であつた。

とろろん娘は念願の横須賀海軍カレーと神戸海軍カレーの食べ比べの他に、両方のカレーのあいがけを味わうことができたのだった。

神戸で乗り込んできた料理人は軍が選んだ料理人で、岡山の中岡三世料理長だった。

「うちなーもばんない島があるけど、瀬戸内も島がうーさんやあ（沖縄も島がたくさんあるけど瀬戸内も島が多いなあ）。お能ちゃんがいる島ぬーだろう？あぬ島かあ？」

甲板に出てお能ちゃんのいる瀬戸内の島を探していたとろろん娘。きつとあの島にいるに違いないと指さしたのは、岩だけしかない悪霊島だった。

### くく横浜の港くく

同日、横浜の港から大連に向かう民間船があつた。松山座が満鉄と禁忌日本ツーリストと提携して催した、「銀河鉄道666で行く松山座観戦ツアー」のチャーター船だった。

今回の銀河鉄道計画に尽力した屋島君は、満鉄社員枠を利用して、学生時代に世話になった龍笛家にツアーへの招待状を送っていた。本来なら自分の母親を真っ先に呼びたかったのだが、私的に用いることを恥だと思ったので、丁寧な手紙と共に三枚の招待状を郵送したのだった。

「～お能さんは瀬戸内の小島で教師としてご活躍されておられることと存じます。ようやく教師の仕事にも慣れたことでしょう。お仕事の妨げになると思い招待しなかったことは、後日お詫び致しますので、どうかご家族三人で満州の旅をお楽しみください。～」  
と手紙には書かれていた。屋島君には「あの小悪魔が来ると何やらやらかすかもしいない」と懸念もあつたのだが、もつとスケールの大きい天然小悪魔がやってくるとは思つてもいなかった。

ふ頭には龍笛さん夫妻と山のような荷物を背負わされ、崎陽軒のシウマイを手に持った武尊君が乗船の時を待っていた。

龍笛一家の後ろには新婚旅行に今回のツアーをゲットしたヒデブ夫妻が並んでいた。列の後ろの方には子供たちやお孫さんに送られる童話作家のナオコさんの姿があつた。

搭乗が始まると慌てて駆けつけてきた。パツパラおばさんが走ってきた。愛犬の世話を夫に押し付けて家から逃げるようにやつて来たのだった。

ほたるの光も投げテープもないままいつの間にか船はふ頭を離れていた。

座敷席にはステージが設けられ、マジックショーや落語などステージは賑わいを見せていた。

「おい、今戦争中だよな。」

龍笛ハズバンドの言葉に

「たまには忘れましょうよ。」

と答える龍笛さんであつたが、

「たまには意識してもいいんじゃないか？」

と腕組みするハズバンドであつた。」

芸人のステージが終わつた舞台では麒麟児家のみいちゃんが歌を歌つて絶賛されていた。

「どつちに似たんだろうね。」

と、ポテチを食べながら麒麟児夫婦は顔を見合わせていたが、どつちに転がつても芸達者だつただろうと皆は思っていた。

### ～～神戸のそばめ～～

その頃、神戸の焼きそばやでは菊宗政監督とほおでえさんと帰依住職がソバメシを食べていた。神戸に船が立ち寄るのは翌朝になるので、一足先に愛媛と名古屋から神戸に集結していた。

三人は獄門島の話で盛り上がっていた。帰依住職が初めて島に行った日に船酔いでボロボロになつていた湖東先生は見習看護士のアヤカちゃんと結婚することになった裏話が語られていた。

例によつて獄門島に来た湖東先生は以前よりいくらかよくなったものの、相変わらず船酔

いに悩まされていた。その湖東先生を介護するアヤカ看護師の姿を見て、お能ちゃんがこっそり、小悪魔のささやきをしたのであった。

「アヤカちゃんは湖東先生のこと好きみたいね。」  
と耳打ちし、アヤカ看護師には

「湖東先生はアヤカちゃんのこと好きみたいよ。」  
と耳打ちをした。

どこかで歯車がかみ合うと一直線の朴念仁ですから、二人は大神神社に向かい。

「この木は桂の木と言って、愛染明王の……。」

「先生、どう見ても杉の木です。それにここは大神神社。」

映画「愛染かつら」を見ているアヤカちゃんであった。

が、神社の木陰で村人が唄う「旅の夜風」をBGMに湖東先生とアヤカちゃんは結婚することが決まったのだった。

そういう勘違いが不幸の元なんだよねえ！男と女つてバカだよねえ。と他人の噂で盛り上がる三人であったが、一人はいまだに独身だった。

### 〳〳その頃獄門島では〳〳

「メス」

「はい」

「モノポローラ」

「この島に電気はないけど、は」

苗院坂の麓の旅籠・本陣で巡回診療船の臨時の医師が大きな目を見開いてメスを握っていた。ほおでえ看護師は満州旅行、見習看護師のアヤカちゃんは結婚準備で来られない。

お能ちゃんがゴスロリナース姿で助手を務めさせられていた。

「大丈夫ですか先生？」

旅籠・本陣の主の野々宮与六が声をかけると

「大丈夫！私、失敗しないので。」

と鋭い目つきで睨み返した。

松山の病院から単身獄門島に乗り込んできたフリーランスの凄腕の女医、大間美智子だった。「私、失敗しないので」を信条としていたが、結婚に一度失敗しているバツイチなのでドクターX(バツイチ)と呼ばれる医師だった。

「あんた。ピンセットでしつかりその皮を持ち上げて。」

「はい。」

「終わったわ。あとはワサビとショウガをすっておいて。」  
鯛の刺身が完成した。

### 〳〳海軍の動き〳〳

一方、陸軍の隠密計画を気にする海軍は、潜水艦で陸軍のチャーターする船を追尾することになった。

出入り口のハッチを一回り大きなものに改造したイ号潜水艦には、陸軍の旅行団に潜り込ませる潜水夫の富井と、元海軍のアンニン、京都の学者の説博士が乗り込んでいた。

最初からこの大きさのハッチを付けていてくれたなら、アンニンは腹がつかえることがなく潜水艦の搭乗員になれたのに、と思うと、

「なんてこったい。」

とぼやいてしまった。しかし、潜水艦の出入り口のハッチが大きくなることで強度に影響ができて、潜水能力が下がることを説博士は凶面を描いて説明し始めたので、アンニンと富井は熟睡することができた。

三人を乗せた潜水艦は明石海峡に待機して陸軍の船団が来るのを待ち伏せた。

潜水艦が浮上するときには何かにつつあったような音がして、明石海峡大橋にぶつかったのではないかと皆は思った。

戦前から明石海峡に橋を架ける計画は存在したが、大型戦艦が明石海峡を通過できなくなるのが懸念されていた。

説博士は浮上する時に海上に出る潜水艦の船体と明石海峡大橋の水面からの高さとの相関関係について図を描いて説明を始めた。

「それに、この橋ができるのは五十年後のことであり、今の時代では……。」  
まだ深夜と言うこともあり、皆は眠りに落ちていた。

潜水艦が浮上するときには小さな木造漁船を持ち上げ、海面に叩き落としていた。深夜に明かりもともさず明石海峡を渡る不審船。日本海なら半島からの作業員の常套手段だが、ここは瀬戸内海。

夜陰に乗じて神戸に渡り製鉄工場に破壊工作を仕掛けに行くコミンテルンが乗り込んだ木造船だった。朝鮮人は泳げないので乗り込んでいたコミンテルンは皆海底へと沈んでしまった。指揮をしていた仙谷由人と言う日本人を名乗る抗日パルチザンも浮かび上がってこなかった。なので朝鮮人だったのだろう。

海に沈んだ共産主義者を食べたことで明石の鯛は赤くなったと言われている。

ほな、ぼちぼち行きまひよか！と海峡を渡る陸軍の船を発見して追尾を始めたイ号潜水艦。朝食に富井が沖繩諸島を潜水した時に仕入れてきたヤギ汁を温め直した。

強烈な臭いが潜水艦内に蔓延したため、島々の位置に関係なく蛇行しながら瀬戸内海を通り抜けて行った。

### 〳〳何故か上海バンスキング〳〳

ジャズと言っても戦前のジャズはダンスミュージックが主体だったので、2ビートを基本にした管楽器中心のビッグバンドジャズだった。

この時代にはチャーリー・パーカーなどが新しい音楽形態を模索していたが、少人数でより自由な演奏の4ビートのモダンジャズが出てくるまでは十年ほど待たねばならなかった。

上海日本租界で須田のオジキの経営するキャバレー・サンケイではトロンボーンとドラムがリハーサルをしていた。

4ビートのリズムに乗せてトロンボーンが不協和音を入れたメロディーを奏で、それに對してドラムがシンクローションを織り交ぜたリズムで応酬する。まるで楽器の演奏で對話をしているようだった。

「ガチョーン。どうやら満州で奇妙な動きがあるようだぜ。」

ダニー・啓がトロンボーンで語り掛けると、

「目的は何なんだ？ 阻止したほうが良いのか？」

とドラムが応酬する。

「与一君が満州に行ってるけれど、あいつは間が抜けているので、お前さんも満州に行つてくれないか？ ガチョーン。」

「それは構わないけれど、バンドのドラムスはどうするんだ？」

「お前さんの代役は用意してある。ガチョーン。」

こうした会話を言葉で直接すればよいものを、わざわざ楽器でやらねばならないのは作者の趣味だった。

英国租界にいたスコットランド系の幼い少年が開店前のキャバレー・サンケイに来てはドラムスに見とれていた。

「リチャード。おじさんはお仕事で北の方に行くことになった。ドラムスの練習、しっかりするんだよ。多分君たちの時代には 8ビートが主流になっているかもしれないな。君はきつとスターになる。」

とドラムを叩いていた小柄な男はカウンターにあったリングゴを少年に手渡した。

陸軍中野学校の工作員でコードネームがスターキーと呼ばれるおじさんであった。

ドラムを習いに来ていた少年は、後にプロとなり、憧れのドラマーの名を借りてリチャード・スターキーの名で活動していたこともあったが、あるバンドに加入した時に、この時もらったリングゴと、「君はスターになる」の言葉を思い出し、リング・スターと名乗るようになった。

リング・スターがリードボーカルをとった「イエロー・サブマリン」が日本の音頭のリズムを踏襲したのではないかと言われる所以はこの時代にあったのかもしれない。

キャバレーのバンドにはハナと言う男が新しいドラマーとして加入し、スターキーは写真屋に扮して満州に潜り込むことになった。

### 〳〳松山座の楽屋〳〳

その頃すでに満州入りしていた松山座はアムール川(黒河)を隔ててソビエト国境に接する黒河の街で興行をしていた。

ようやく松山座の一員として上海に渡った加奈子であったが、既に与一君は上海を離れた後で、与一君が仕立て屋をやっていた店舗には別の住人が住んでいた。青島、天津、奉天、新京。与一君が立ち寄った痕跡は感じられてもいつも一步遅くて出会うことはできず、北の最果て黒河までたどり着いた加奈子であった。

松山座の楽屋では、レスラーとなつて与一君を追いかけ大陸に渡った加奈子に同情が寄せられていた。特に松山座レディースの間では加奈子臍膺が過熱して、みゆきちゃんやリング

に上がる時にぶら下げて入場する生首人形が与一君の顔を模した人形になっていた。

松山座には新たなスターも誕生していた。カザフスタンに近い街で興行をした時に、一人のアメリカ人が逃げ込んできた。

米国の徴兵を逃れて逃げ回っている大柄なアメリカ人で、パキスタンからアフガニスタンに入り中央アジアをタジキスタン、ウズベキスタンと渡り歩いてきたので、スタン・反戦と言うウリン・グネームで活躍していた。

おおざっぱなアメリカ人なので、相手をロープに投げ飛ばして、伸ばした自分の腕で相手の首をへし折るリアアートと言う技しかできなかったが、キルギスタン・リアアート、トルクメニスタン・リアアートとご当地の名前を入れることで人気を得るようになり、後にアメリカに帰国が許されてウエスタン・リアアートが世に知れるようになった。

ドイツ系・オランダ人と称するカール・クラウザー（のちのカール・ゴツチ）もまだ松山座で修業をしていた。スバル選手のお稲荷さんスープレクスを極め、ジャーマンスープレクスを生み出すために苦勞していた。

同盟国のドイツ人と言うことで松山座に参加していたので、入場の際には三味線弾いて都逸を謡いながら入場するパフォーマンスが人気を得ていた。

ハルビンで満州国が国威発動のために新設したハルビン体育館のこけら落としに松山座の参加が決まっていた。松山座は黒竜江省の街を転々としながらハルビンを目指すのでした。

### 〜飛驒の里〜

「カシラアゝ。死んだかい。」

陽炎婆さんの元気な声が屋敷の中に響いた。

「死んでおるのか？生きておるのか？ボケちまつてわかんないだよ。」

飛驒忍者のカシラ、带状放心齋は両手に二本の杖をもち体を支えながら縁側に出てきた。

「郵便局が来てなあ。手紙おいてったぞお。」

「赤紙か？みんな出払って、村には男衆なんか残ってないぞお。黒影は開拓団で移民しちゃったし、赤影と青影は徴兵されちゃった。白影は金目党と戦っている最中じゃあ。」

カシラは湯飲み茶わんを手に空を眺めた。村に残っているのは年寄りばかりだった。

「風魔のマチからの手紙じゃ。」

陽炎婆さんは風魔のマチ姐さんが北京から出した手紙をカシラに手渡した。

「よわたたのう。こりや無理じゃ。」

手紙を開封して読み始めたカシラはそう言って天を仰いだ。

「無理じゃあ仕方ない。干し柿持ってきたから食おう。」

陽炎婆さんは紙袋から干し柿を取り出し、急須にお湯を入れて縁側に腰かけ、カシラと一緒に日向ぼっこをした。カシラがマチ姐さんからの手紙を読んで「ダメ」と判断したのは、文字が小さくて何が書かれているのか？郷土の老眼で読めなかった。

天井からロープに伝わり、全身包帯だらけの人間が降りてきた。カシラの傍らにあった手紙を読むと、何やら耳打ちをした。

「飛驒の最終兵器！ほいじゃあ、行ってこいやあ。」  
カシラに言われるとその包帯だらけの人間は立ち上がることなく這うように屋敷を出て行った。飛驒の最終兵器、ミサオちゃんだった。最終兵器と言っても、みんな出払い、残っていたのが水疱瘡で寝込んでいて、歩くこともままならないミサオちゃんだけだった。

飛驒同様に風魔忍者も軒並み男たちが兵役に行ったり、移民してしまったりで人手不足の所に来て、「スケバン刑事」で路線変更したものだから内情は似たような物だった。今日の高齢化限界集落に似通った状況は戦中の山村でも起きていた。

考えて見れば終戦後、満州や朝鮮半島のみならず、ニューギニアやパラオなどの南方の島々からも日本人移民が帰国してきたため、日本の人口が急激に膨れ上がった。しかも、ベビーブームで団塊の世代が生まれている時代。

このままでは早晚食糧危機が起きると予想した国は、ブラジルなどを中心に中南米への移民政策を行い、都心では「文化住宅」なる狭い団地を推進して大家族にならないよう誘導した。その結果人口急増は抑えられたかに見えたが、半世紀後には出生率の低下を招くことになった。時代には潮目があるのだが、それを読み違えた失策の一つかもしれない。

ミサオちゃんは愛馬の蓮裸(はすらー)に乗って富山に向かい、わくわくメロンさんの漁船、白エビ丸に乗せてもらって沖に出ると。抗日パルチザンの拉致船を襲撃して乗っ取り、黄海に向かつて航海した。A.T限定免許で。

### 〜陸軍御用船〜

とろろん娘たち陸軍御一行様を乗せたチャーター船は、関門海峡を抜けると博多の港に立ち寄った。博多港ではさつま揚げと辛子明太子の入った土産袋に芋焼酎のビンをぶら下げて白髪の紳士が乗り込んできた。九州のまさおさんと言う薩摩の大御所だった。

「お嬢さんお出迎いがとてごあす。こいは差し入れてごあす。みんなで食べてくれもはん。」

船上で土産の手荷物を受け取ったとろろん娘はそのずしりとした重さに体がよろけた。

「くりほどぬ差し入れ持ってくるや、くぬ人や大物んかいちがうらん。」  
土産でその人の人となりを判別できるとろろん娘だった。

この時点で日本軍は南方への兵力を増強するかしまいかまだ迷っていた。その情報を探ろうとしたリヒャルト・ゾルゲによるスパイ事件が起こり、日本は南進すると言う情報がソビエトには届いていたが、ソビエトもいつ日ソ不可侵条約を破って日本へ攻め入るか様子を見ていた。ドイツとの戦線でもそれどころではなかったこともある。

ちなみに、ゾルゲ事件でリヒャルト・ゾルゲと一緒に逮捕された朝日新聞社員だった共産主義者尾崎秀実(おぎさきほつみ)は近衛文麿の第一次近衛内閣に関わっている。満鉄調査部に嘱託職員として東京支社に勤務、日中戦争へ向かわせる工作をしたと言われている。ゾルゲと尾崎は昭和十九年十一月七日、巣鴨拘置所で処刑された。

艦内では南か北かで重鎮たちがお互いの腹の探り合いをしていた。どちらにしても民間協力を要求されるが、会議に口を出せない柴台社長と九州のまさおさんは陸地測量部の部屋にいるフルカワ先生と千葉の宵宵先生の元を訪ねていた。

ここで、柴台社長は今までの常識を覆す戦車の構想をぶち上げ、フルカワ先生も宵宵先生も興味を示した。地理オタの安徳君が作った満州立体模型を見ながら配置なども語り合われた。

”大君は神にしませば天雲の雷の上にいほりせるかも”  
安徳君は愛国百人一首の柿本人麻呂の歌を引き合いに出し、この新型戦車は「人麻呂式戦車」と呼ばれることとなった。

とろろん娘は陸軍将校たちの会議室の末席で、おむすびを食べながら話を聞いていた。南か北か？とろろん娘は横須賀海軍カレーと神戸海軍カレーを思い出していた。両方を半分半分にかけて食べたあいが一番おいしかった。ライスも大盛ならもつと良い。偉い人たちが悩む気持ちがよくわかった。

市ヶ谷に残してきた陸軍参謀の辻政信は自分の功名心しか頭がない男で、こうした会議に参加させてもかき回すだけなので、実は国の明暗を分ける重要な話し合いがここで行われていた。

辻政信が勝手に南に戦力を増やすことだろうから、今はこうして陸軍幹部が満州入りすることで北への増強をすると見せかけ、ソビエトをけん制して一気に南方からの石油ルートを確認すべきでは？と折衷案が出た。

「これやあ！めんたいこやいびーん！」  
とろろん娘は突然立ち上がった。先ほど九州のまさおさんが持ってきた辛子明太子をおむすびのおかずにご食べたらとんでもなくおいしかった。やっぱ日本人はおむすびだ！おむすびには明太子だ！と感動したのであった。

「おおそうかあ。とろろん君はこの意見に賛成してくれるかね。」  
軍の重鎮たちは事あるごとに「今時の若いもの」とボヤいていたが、とろろん娘の決断の潔さにいたく感心した。じいさんたちには沖繩弁はわからなかった。  
こうして日本の進むべき方向は決まったのであった。

### ~~~~イ号潜水艦~~~~

陸軍のチャーター船が中岡三世料理長のアワビと明石のタコ料理でディナーをしている頃、その船を追尾する海軍のイ号潜水艦の中では、富井潜水夫がお好み焼きを焼いていた。アンニンも説博士も関西人なので三度の食事の食前食後にお好み焼きを食べられる人種であったが、密閉された艦内でお好み焼きの煙はなかなか浄化されなかった。艦内にいる乗組員がお好み焼きを食べずにいられなくなる、オコノミ―症候群が重大な病であることが見つかる半世紀も前の時代であった。

潜水艦から唯一海上に出ている潜望鏡は、明石海峡で浮上の際に破壊したコミンテルンの木造船に乗っていた仙谷由人をひっかいたまま海中を進んでいた。魚たちがまとわりついていた。魚に食いつくされて骨になった仙谷由人は東シナ海の海中に落ちて行った。

### ~~~~お座敷船~~~~

横浜から出港した松山座、満鉄、禁忌日本ツーリストのお座敷船は陸軍船と潜水艦から少し離れて同じルートを走っていた。

座敷の広間ではみいちゃんを先頭に神戸から乗り込んだ男前のカオリ家のタカシくんや弟君が飛び回っていた。弟君はおむつをかえようと脱がした瞬間に逃げだしたため、フリチンで艦内を飛び回っていた。「女」を三つかいて「姦しい(かましい)」と言うが、子供も三人集まると賑やかさを増す。

ガキ共の皆さんの格好の標的になったのは武尊君だった。両手を広げて飛行機のまねをしながらかつ飛んできて。武尊君に飛び蹴りをして去っていくガキ共連隊であった。

その様子を細かにメモしている児童文学者のナオコさんがいた。孫も連れてくればよかったと思いつつも、もつとワイルドに暴れられたら？と考えると、恐ろしくなった。

「あれがお能のいる島かしら。」

「結構大きな島だな。」

龍笛夫妻は船の左側の窓に映る島を眺めていた。残念ながらその島は四国本島だった。

その四国本島の今治ではようやく水疱瘡が治った犬神家出身の月野雫さんが脱皮を繰り返していた。雫さんはエビアレルギーで、病院食で出たエビのすり身をうっかり食べてしまったのであった。雫さんのエビアレルギーはエビのように脱皮を繰り返す症状だった。

お座敷船には絵の上手な小学生が二人乗り込んでいた。一人は横浜の港から乗り込んだきた小野寺章太郎君と言い、もう一人は神戸から乗り込んだ横山光照君と言った。

二人は道中の船の中で龍笛さんに絵と漫画のレクチャーを受けていた。後にこの二人が石ノ森章太郎と横山光輝という漫画家になるのであった。

### 〜〜ハルビン郊外〜〜

ハルビンを流れるスنگアリ(松花江)の南側は街として開かれていたが、北側はほとんど人が住まない土地だった。町のある南側は堅固な堤防で守られていたが、北側は大した堤防もなく、何年かに一度起きる大水の時に、松花江の水が北側に流れ出すことで街が守られていた。

その不毛の地に七三一部隊の研究室が作られていた。元々はハルビン医科大学で生物兵器や化学兵器などを研究していたのだが、日本が抑えることで拡散を防ぐ目的もあった。

その周辺の巡回を命じられた萌ゆる大空軍曹は、なぜこんな場所に研究施設のような建物があるのか、何をしているのかも知らされていなかった。意味が解らないまま軍用トラックで巡回していた。

「最近、上層部がやけに騒がしくないか？大連で何かあるのだろうか？」

「ハルビン体育館ができるので、大本営からもえらいさんが来るんだろう。」

同行した部下がそんなうわさ話をしていた。

軍用トラックの荷台に立って双眼鏡で監視していた萌ゆる大空軍曹の視界に怪しい人影が映った。怪しいと言っても頭がおかしいと言う意味で、こいつは正気の人間ではないと萌ゆる大空軍曹は背筋が凍った。軍用車はその男の隣を通り過ぎた。

後に葉害エイズ問題で名をはせる安部英(あべたけし)医師だった。

終戦後、この施設はソビエト軍に占領され、化学剤や生物兵器はソビエト軍によって処分されたため、日本はどこで何が処分されたのかは知るところではない。

ドイツにも同様の研究をしていたバイエル社があるが、その技術を残しておきたいため連合軍による解体は免れた。現在もバイエル社は殺虫剤や農薬の開発で優れている。

七二一部隊の研究者たちも研究情報を提供することで戦犯免責を受けた。毒と薬は紙一重である。

「何度来ても気持ちの悪い場所だな。」

萌ゆる大空軍曹は感覚的にこの地域を忌み嫌った。

駐屯に戻った萌ゆる大空軍曹にはハルビン体育館警護の命令が下った。

### ~~~~大連では~~~~

それぞれの思惑を乗せた船や列車が次々と大連に到着した。

日本海で抗日パルチザンの拉致船を強奪した飛驒忍者ミサオちゃんの操船する船もブレキがわからずふ頭に乗り上げたものの無事到着し、ミサオちゃんはすいとんの術を使って忽然と姿を消した。

「あら、すいとんを作ってるの？すいとんは愛する夫や子供たちのことを考えながら作るとお団子の硬さがいい塩梅になるのよ。お野菜を入れる順番はねえ。……」

ビルの影ですいとんを茹でていた飛驒忍者のミサオちゃんにすいとんの作り方を指導する龍笛さんだった。この人も忍者？と見上げるミサオちゃんだった。

シヨウ・チャンツーはアフロヘアのカツラを装着し、バイオリニストの葉加瀬太郎に化けて大連の街に入り込んでいた。

マチ姐さんは高田真由子に変装するか？と思ったら、スケバン刑事のままだった。

「あれ？みゆきちゃん？」

飛驒忍者ミサオちゃんを松山座のみゆきちゃんと勘違いして後をついて行く影があった。

東シナ海の海に漂っているところを海軍の輸送船に救われ、大連までやってきた秋田のネロさんと犬の次男坊であった。